

むきばんだ花だよ！

10月

2017. 10. 7



シナアブラギリ (トウダイグサ科・アブラギリ属)

◎シナアブラギリ(支那油桐)トウダイグサ科、アブラギリ属。別名：オオアブラギリ、中国南部原産の落葉高木。○**名前の由来**：中国原産のアブラギリの意味。ところが別種のアブラギリも中国原産で広東省、福建省に分布し、アブラギリが日本に伝えられた約300年前の江戸時代に栽培が普及し一般化した後に、シナアブラギリが再度中国から伝わったと云われます。○**シナアブラギリ**は「オオアブラギリ」の別名のとおり、花や実がアブラギリよりも大きく、また取れる油の質も良いそうです。○**花言葉**：歓喜。★用途：昔は種子から油を取るために栽培されていました。桐油は空気に触れると酸化して固まる乾性油で、和紙に浸み込ませた油紙を和傘(旧淀江町は和傘の産地で戦後の傘不足時代には、製造業者70軒余、年間生産量は50万本に達したこともあります。)や提灯、雨合羽等に使うため盛んに栽培されました。**毒性が有るために食用になりませんが**、後には印刷用インク・ニスなどに用いられたそうです。★暖地の山野に野生化し、花の時期になると、遠目には、さくらの開花を思わせるほど花を咲かせ、また花期が長く、ソメイヨシノが咲き終わる頃から目立ち始めます。アブラギリ属は雌花と雄花が別々で同じ木に両方の花が咲く「雌雄同株」です。高い木の梢には沢山の花が咲き、雄花は萎れる前に早く落下します。地面は花だらけになります。落下している花は雌花ばかりです、その理由は雌花は枝先に1個(まれに複数)しか付かないからです。
撮影日：2017, 10, 7, ★ 撮影場所：妻木山地区。



ツバキの実



ヤマヒサゴ (マズ科・ヒサゴ属)



コウジ (ミヅウツギ科・コウジ属)



コバナガマス (スイイカスラ科・ガマス属)

◎ウメモドキ(梅擬)、モチノキ科、モチノキ属。別名：オオバウメモドキ。落葉低木。日本原産。雌雄異株。○**名前の由来**：葉や花が梅に似ていることの名前ですが、ウメの仲間ではなくモチノキの仲間なのです。モチノキ(擬き)とは「似て非なるもの」「匹敵するもの」の意味です。○**花言葉**：「明朗」、「知恵」で誰にでも送ることのできる花言葉です。★5~6月に淡紫色の小花をつけ、9月頃には5mm位で球形の果実が枝にびっしり付き赤く熟します。果実は秋から落葉後の真冬まで長期間観賞でき、趣も異なり見る人を楽しませます。主に実を観賞する庭木として玄關脇や池の端、燈籠周りに添える木(火障「ひざわり」の木)として用いられます。また赤い実は小鳥の好物で、野鳥を呼ぶ庭木とも云えるかも知れません。
★ 撮影日：2017, 10, 7, ★ 撮影場所：妻木山地区。



ウメモドキ (モチノキ科・モチノキ属)



フチハナヒサゴ (ヒサゴ科・ヒサゴ属)



モチノキの葉



ウバウリ



シロダモ (クスノキ科・シロダモ属)



イノコズチ (ヒユ科・イノコズチ属)

◎イノコズチ(猪小槌)、ヒユ科、イノコズチ属。日本固有種。別名：ヒカゲノイノコズチ(近縁種のヒナタノイノコズチと対比し付けられた名前ですが両者の差異は微細です。) ○**名前の由来**：茎の節が膨らんで、猪の膝の様に見えこれを槌に見立ててこの名がつけました。フシガカ・コマノヒザとも呼ばれます。○**花言葉**：命燃え尽きるまで。★分布：本州、四国、九州の山野、路傍、藪などに生育します。★特徴：茎は四角形で節が固く、高さは1m前後、葉は対生で先の尖った楕円形、長さ15cm位で両面に毛があり、茎の上部から細長い穂状花序を出し緑色の小花を多数つけます。果実はとげ状で動物や人の衣服に付着して種子を伝播させます。★利用：根を乾燥して作った漢方薬を牛膝(ごしつ)と云い、利尿、強精、通精、通経薬、また俗間では臨胎薬としても使われたようです。若芽や種子は食用に供されます。○俳句の季語は秋です。
★撮影日：2017, 10, 7, ★ 撮影場所：やよいの館裏草地。

◎オナモミ(葉耳、卷耳)、キク科、オナモミ属。

一年草。雌雄異花。○別名：地方により異なるが、ヒツクキムシ、カミノキ、ドロボウ、ヤマナスビ、ゴンボ、など。

○**名前の由来**：雄生採(オナモミ)で毒蛇に噛まれたときなどに、生の葉を揉んで傷口に付けて痛みが和らぐことに由来し、別属で草姿が優しいメナモミ(雌オナモミ)に比べて大きく強いことから名付けられようです。○**花言葉**：怠惰、頑固、粗暴、カギ状のトゲのある実が衣服に付くとなかなか取れなかったり、人や動物にタネを運んでもらうため。★精密な生物時計：オナモミは生物時計が精密で、8時30分の暗黒時間を経て蓄を付ける性質があるが、8時間15分では蓄を付けない、短日植物(イネ・キク・アサガオ・コスモス等)です。★花は多数集合した頭状花序で、上の方に雄花の集まり、葉腋には雌花が付きます。萼に見えるのは総苞と呼び、花を付ける茎に付く葉です。「オナモミ」は総苞が肥大して固い殻になり、果実(の集まり)を包んでしまう。その表面に棘が付きだしており、この棘を衣服や動物の体に引っ掛けて種子を伝播させます。この特性のため、「ひつつき虫」などとも呼ばれて、マジックテープのヒントになったと云われます。棘の一本はキクの「花」の「萼」(総苞)の一枚に相当し、その殻を切り開くと、中に真の果実が2個入っています。○**原産地**：アジア大陸原産で日本にはかなり古く侵入し史前帰化植物と云われます。オナモミ属には、オオオナモミ(北米原産で、オナモミより大きい種類で、最近増えています)・トゲオナモミ(ヨーロッパ原産と云われトゲを持つ種類で葉も細い)・イガオナモミ(アメリカ大陸原産で最近生育範囲を広げている)があります。○オナモミは、絶滅危惧Ⅱ類(VU)に指定(東京、関西一帯・高知では絶滅)されています。○**漢方では蒼耳(そうじ)、和名では奈毛美(なもみ)**と云い、**切り傷や、虫刺されに生葉を揉んで付けると良いそうです。**

★撮影日：2017, 10, 7, ★撮影場所：やよいの館裏草地。



オナモミ (キク科・オナモミ属)



ヒヨドリバナ (キク科・七郎アザミ属)



ナツハゼ (ツツジ科・スノキ属・種ナツハゼ)



コマユミ (ニシキキ科・ニシキキ属)



ガンシヨウコ (フウロ科・フクロアザミ属)



アキノギン (キク科・アキノギン属)

◎ツルボ(蔓穂)、

ヒヤシンス(ユリ)科、ツルボ属

別名：サンダイガサ(傘内笠)。多年草、球根植物。原産地：

東アジアで日本(北海道西南部~南西諸島)、台湾、中国東北部~西南部に分布する。○**花言葉**：誰よりも強い味方。

○**名前の由来**：宮中に参内するとき貴婦人が使った柄の長い傘を畳んだ形に見立てたもの。また球根の外皮を取ると、つるりとした坊主頭に似せて「ツルボウズ」から転訛して「ツルボ」になった説もあります。ツルボは漢字では「蔓穂」と書きます、「ツル」でないのになぜ蔓穂なの? 牧野博士の植物図鑑には不明と書かれています。★日本では野原や畑地等日当たりの良い適度な湿地で見られ、ツルボの仲間には世界におよそ90種類もあるそうです。★**特性**：葉は細い線形で地際から出て春と晩夏の2回、はっきりと時期を分けて出る面白い性質があります。晩夏の出葉と同時に花茎を伸ばし、紫がかつた淡いピンク色の花を穂状に沢山咲かせます。まれに白い花をさかせるものもあり、それはシロバナツルボと呼ばれ区別されています。地下に径2~3cmの卵球形の鱗茎があり食べられます。鱗茎は飢饉の時に食料として役立ったそうです。水によく晒したものを煮て食べたり、粉にして餅を作ったそうです。★**薬効・使い方**：腰痛、ひざの痛み、打撲傷にすりおろした鱗茎を患部に擦りこんだり、塗布したガーゼを貼り、乾いたら1日数回繰り返します。★豊臣秀吉の命で朝鮮半島に出兵した、加藤清正は、中国、明時代の文献「救荒本草(きゆうこうほんそう・1403)」を日本に持ち帰りました。これに飢饉の時の食物の記述があり、それからルツボが見直され「有毒とする書もある」、食用や薬草として利用されたそうです。

★撮影日：2017, 10, 7, ★撮影場所：公園入口門前横草地。



ツルボ (ユリ科・ツルボ属)



ツルボ 「丸山拾遺」に「紫果也、皮むきかたへんでね。」



2016 04 16 鳥取県・八尾(津東)の鳥取



「方々」(方々)の足跡
「おん」の種子に止まって黄鼠の足跡

★むきばんだを歩く会★

- 指導：鷲見寛幸先生(鳥取県自然観察指導員)
- 毎月第1土曜日午前9時30分~正午
- 入会金 2000円 毎回資料代 300円 いつでも、どなたでも入会可能です
- 問い合わせ：むきばんだ応援団「むきばんだをあるく会」